

いまだから言えるひとこと

渡邊正吉

東京都・六六・元教員

あなたと初めて、それも、二人だけで、四月二二日、氏神様・春季例大祭の日に、奥武蔵高原へ行ったのを覚えてますか？

あれから、すでに四一年も経ったのです。

春のあたたかい日ざしでむせかえるような草いきれの中を、沢のせせらぎに沿って、急な傾斜の山道を、ときに息をはずませながら、手をひいたり、あなたを背におんぶしてせまい流れを渡ったり、したっけね。

あるとき、あなたは、まだ一四歳。

私は、あなたと一〇歳ちがうのだから二四歳、あなたの胸のふくらみが、私のYシヤツを通して、ほのかに感じるぐらい……。

あなたが、私の背を、そして、引いた手を、どう感じたかは知るよしもないが、私は、いまのいまといったなまなましい感覚として、実に鮮明に記憶しています。

そして、ずっと、いえなかったひとことを、心の奥底では悔んでいるのです。

いま、あなたも幸福な結婚をして、三人の母となり、やさしいであろう御夫君と楽しい生活をなさっていて、「よかったなあ」と思う一面で、「結婚しよう」と、心の本音をいわなかった無念さが、後悔とさえなっています。

かといって、私が、不幸だというのではないのです。

私も、あなたが卒業してから、二―三年経て同職の女教師、いまの妻と、燃える恋をして結婚し、一男一女の父となり、その子等も家庭を持って、私は現在、三人の孫に囲まれそれなりに幸福な毎日を送っているのですが、誰にも言わないけど、私の真底には、あの色白で、賢く、美しすぎるほど美しいあなたが、たぶん私が一生を終るまで、消えずに残っているでしょう。

あるとき、「教え子」の三文字にこだわって、変に道徳的であろうとして格好をつけ、言えなかったひとこと。

「あなたが好きだ。どうしても結婚してくれ」

いまだから、奥武蔵の峠にむかって叫ぶのだ。